

情報通信審議会情報通信技術分科会
衛星通信システム委員会（第34回）会合 議事要旨

1 日時

平成30年6月15日（金）10時30分～11時20分

2 場所

総務省 10階 1001会議室

3 出席者（敬称略、順不同）

(1) 構成員

安藤 真（主査）、井家上 哲史（主査代理）、有木 節二、碓井 照子、片山 泰祥、加藤 寧、庄司 るり、松井 房樹、三神 泉

(2) 関係者

三浦 俊二

(3) 総務省（事務局）

基幹・衛星移動通信課 高地 課長、林 電波利用分析官、安澤 課長補佐、郷藤 係長

4 議事概要

議事に先立ち、事務局より出席状況の報告及び配付資料の確認が行われ、第33回会合の議事要旨である資料34-1の紹介があった後、以下の議題について審議が行われた。

(1) 「2.5GHz帯/2.6GHz帯を用いた国内移動衛星通信システムの技術的条件」の検討開始について

資料34-2に基づき事務局より、説明が行われた。説明後、以下の質疑が行われた。

松井専門委員 : 衛星は上がれば10年か15年の寿命になると考えられ、その時には5Gが全盛の頃になっており、災害対策とはいえ、5Gとの関わりを常に考えながら次の技術的条件を考えるべきではないか。現在のシステムとの共用検討も大切だが、次の衛星通信システムを考えるに当たって、5Gとのことも考えて検討をしてほしい。

安藤主査 : 重要な点だと理解している。5Gにおいては、様々な方式がそれぞれの得意なサービスを提供する統合的なシステムとならなければならない。

有木専門委員 : 検討の開始時点で、この拡張する周波数帯はまったく利用していないという理解でよいのか。

事務局 : 然り。

加藤専門委員 : 今回検討する衛星は非静止衛星か、それとも静止衛星か。

事務局 : 静止衛星である。

安藤主査 : 関係者としては、コメント等があるか。

三浦関係者 : 将来的には5Gの時代なので、5Gとの関わりも考えていかないということは理解している。5Gが使えない場所において衛星通信システムが補完することが必要だと考えている。次世代の衛星では、特にデータ通

信を重要視しており、現在のサービスより通信速度、周波数利用効率の向上を取り入れる。現在のN-STARの災害時や船舶への重要性も考え、必要な人により良い回線を提供したいと考えている。

安藤主査 : 衛星のアンテナはどのようなアンテナを想定しているか。

三浦参考人 : 傘型のアンテナを想定している。

(2) 衛星通信システム委員会 調査検討の進め方について

資料 34-3 及び資料 34-4 に基づき、事務局より説明が行われた。

(3) 今後の調査検討スケジュールについて

資料 34-5 に基づき、事務局より説明が行われた。

安藤主査 : 10 月頃のパブリックコメントは並行して 2 つ行うという理解で良いか。

事務局 : 然り。

(4) その他

井家上主査代理 : 委員会の開催が前回から 1 年経過しているので前回から今回までの間の新しい動きを確認したい。

事務局 : 作業班を 2 回開催した。主として L 帯の非静止衛星システムの高度化について共用検討の状況を中間報告という形で報告した。L 帯の検討結果については 8 月頃に明らかになってくると考えている。また、Ku 帯の非静止衛星システムについては海外でも同時に議論が進んでいるため、その状況等を作業班で報告をしている。先に L 帯から先行して議論していたが、Ku 帯の動きが加速しているということで、スケジュール的に重なってきている。

井家上主査代理 : Ka 帯に関しては国内の検討は行っていないのか。

事務局 : Ka 帯に関しては国内のサービス開始の見通しが立っていないためまだ検討は行っていない。

【配 付 資 料】

資料 34-1	衛星通信システム委員会 (第 33 回) 会合 議事要旨
資料 34-2	「2.5GHz 帯/2.6GHz 帯を用いた国内移動衛星通信システムの技術的条件」の検討開始について
資料 34-3	衛星通信システム委員会 作業班 構成員名簿
資料 34-4	衛星通信システム委員会 調査検討の進め方 (案)
資料 34-5	今後の調査検討スケジュール (案)
参考資料 1	衛星通信システム委員会 運営方針
参考資料 2	衛星通信システム委員会 構成員名簿